

震災を生きて

記録 大震災から立ち上がる兵庫の教育



編集・発行／兵庫県教育委員会

発刊に寄せて

兵庫県知事 貝原俊氏



平成7年1月17日未明、突如として兵庫県南部を襲い、多くの尊い生命を奪った阪神・淡路大震災。あの悲しみの日からちょうど1年の歳月が流れ、本格的な復興に向けた取り組みが進みつつあります。

さて、この度の震災では被災地の多くの学校が被害を受ける一方、地域住民の避難所として大きな役割を果たしました。また、教職員の方々には、自ら被災者でありながら教育活動の正常化に努めるとともに、避難所の運営についても大変なご尽力をいただいたところです。こうした昼夜を分かたぬ懸命の取り組みが、厳しい避難所生活に耐える被災者の方々に大きな安心感をもたらし、沈着冷静な行動や生活の再建・自立を促す契機ともなりました。ここに、心からの敬意と感謝を表します。

また、私たちは、わずか20秒の揺れで建物や高速道路などが甚大な被害を受け、都市機能がほとんど麻痺するなど、「モノの脆さ」を思い知らされた反面、被災者の方々が、共に助け合い、励まし合って生きる姿や、国内外から寄せられた温かいご支援の数々、さらに若者を中心として空前の広がりを見せたボランティアの輪に、「心の絆の強さ」を改めて痛感しました。

兵庫県では、かねてから「自由で調和ある自律社会」をめざして“こころ豊かな人づくり”に力を注いでまいりましたが、そのことの大切さが改めて実証された思いであり、喜ばしい限りです。

学校にあっては、家庭や地域社会との連携を一層強め、「人と自然」「人と人」「人と社会」のふれあいを深めるなかで、豊かな人間性を培う教育をさらに進められることを念願しております。

この記録集『震災を生きて—大震災から立ち上がる兵庫の教育—』の刊行にあたり、震災の教訓を貴重な糧として、本県教育が一層充実するとともに、兵庫の子どもたちがいかなる困難に直面しても決して挫けることなく、未来への希望と勇気を胸に、こころ豊かに成長していくことを願ってやみません。

はじめに

兵庫県教育長 芦田弘逸

平成7年1月17日、私たちはこの日を永遠に忘れることはないでしょう。淡路島北東部を震源としたマグニチュード7.2の都市直下型地震は、活力にみなぎっていた私たちのふるさとを襲い、多くの尊い人命を奪うとともに、30万人を超える人々に不自由な避難所生活を強いる未曾有の大災害となりました。

県教育委員会においても、多くの学校施設が損壊し、応急教育の場の確保や学校教育機能の正常化など様々な課題に直面することとなりました。とりわけ、次代を担うはずであったいたいけな子どもたちや志半ばの教職員の方々のかけがえない人命が奪われたことは痛恨の極みでした。

生死の境を辛くもくぐり抜けた者にとっては、生きていることのすばらしさ、命の尊さを身をもって知ったことでしょう。また、震災のもたらした困難な状況の中であって勇気を持って生きることや、人の痛みを自分の痛みとするやさしさに触れ、互いに助け合って生きることのすばらしさを実感した人も多かったことでしょう。

また、家族の強い絆に思いを致した人、ボランティア活動を通して人のために尽くすことが自分を生かすことに繋がると気づいた人、亡くなった級友の分まで悔いのないように生きようと心に誓った人、それぞれがその置かれた環境の中で人として生きていく上での大切なことがらを数多く学んだことと思います。

今在る私たちの責務は、失ったものの大きさに倍する教訓を大震災から学び取り、今後の教育に生かしていくとともに、この度の震災で学校がどのような状況に置かれ、どう対応したかを記録に留め、語り伝えていくことです。

震災一周年に当たり、子どもたちの体験の数々や、授業再開に向けた教職員の苦闘の日々、その中で子どもたちとの訣れや再会の喜びなど、震災後の学校における教育活動の取り組みを綴った本誌を刊行する運びとなりました。この記録が「語りべ」となり、時代の流れを超えて人々に語り継がれていくことを心から願っております。

皆様におかれまして、教育の復興に向けて力強く邁進する本県の確かな足どりをと感じ取っていただくとともに、今後の防災教育推進の一助としていただければ幸いです。

震災を生きて

記録・大震災から立ち上がる兵庫の教育

もくじ

発刊に寄せて	兵庫県知事	貝原俊民	6
はじめに	兵庫県教育長	芦田弘逸	7

第1部 大震災の爪痕

■日本が震撼した日	12
地震で被災した学校施設	20
学校の受けた被害	26
■震災体験は語る一生と死の狭間で	33
子どもたちのとらえた大震災	34
教職員にとっての大震災	45

第2部 復興への道のり

■震災発生時の緊急対応	54
阪神・淡路大震災 そのとき学校は—地震後1週間 協力校のうごき	58
■大震災に学校はどう対応したのか—混乱と喧騒の中で—	66
1 学校の管理運営はどのように行われたか	67
2 情報をどのように受け取り、発信したか	74
3 行政と学校の連携	79
■授業再開に向けて	82
学校機能回復の経過	85
分校方式・仮設校舎による授業展開	85
校舎が使用不可能のなかで	90
学校と避難所とが共に生きた日々	94
他校を借用しての再開	98
学校再開から入学式まで	102
体育の授業や部活の工夫	106
学校事務の取り組み	108
転出事務（一時的な転出）について	110
防災教育の実践	112
学校と避難住民との共生・共存	114
避難所が自治組織を確立していった過程	114
避難者に対して教職員の果たした役割	120

■被災者を支えたボランティア活動	127
------------------	-----

第3部 震災をのりこえて

■まなびやに帰る日	138
■再開後の学校運営	153
■震災とストレス—求められる心のケア	159
阪神・淡路大震災と心のケア	河合隼雄 160
解説	162
[事例集] 災害と心のケア	
—子どもたちは—	167
(1) 恐怖の体験をして	167
(2) 命あるものとの訣れ	171
(3) 大切なものを失って	173
(4) 失われた暮らし	175
(5) 絶望から希望へ	178
(6) こころのひだ	183
—教職員は—	187
(1) いのちが失われた	187
(2) こころが壊れていく	188
(3) 絆が切れていく	189
(4) 教職員も被災者だった	191

第4部 提言

■提言 兵庫の教育の復興に向けて	195
■防災教育検討委員会を振り返って—委員の言葉	208

第5部 資料

■地震の科学— [検証] 兵庫県南部地震はどのように起こったのか?	214
■資料集	218
■県教育行政対策の概要	246
■阪神・淡路大震災で亡くなった公立学校の教職員・児童生徒	253

●本誌について

県教育委員会では、平成7年4月に学識経験者による防災教育検討委員会を設置し、被災地域や学校の種類を考慮して15の学校を防災教育協力校に指定しました。協力校と教育委員会で構成した三つの部会が、この震災に関する詳細な記録の収集と検討を進めました。各部会のテーマと構成校は次のとおりです。

- 第1部会 「災害時における学校が果たす役割と防災機能の強化に関することについて」
神戸市立福池小学校、西宮市立大社小学校、神戸市立烏帽子中学校、
北淡町立北淡東中学校、県立御影高等学校
- 第2部会 「学校における防災教育に関することについて」
神戸市立兵庫大開小学校、芦屋市立宮川小学校、神戸市立神戸生田中学校、
西宮市立上ヶ原中学校、県立兵庫高等学校
- 第3部会 「児童生徒の心のケアに関することについて」
神戸市立千歳小学校、宝塚市立宝塚小学校、神戸市立鷹取中学校、
芦屋市立精道中学校、県立盲学校

こうして集められた記録を中心とし、さらに市町教育委員会、学校、その他多くの方々から各種の資料をいただいて本誌を作成しました。なお、編集にあたっては、各部会のテーマを生かした3部に提言、資料を加えて5部とし、それぞれ独立してご覧いただけるよう構成しております。